

第15回 鹿児島市コミュニティビジョン推進戦略会議 会議概要

【開催日時】 平成26年8月29日（金）14時～16時

【場 所】 鹿児島市役所 別館4階 第一委員会室

【出席者】

○委員：石田尾委員長、岩橋委員、籠原委員、神野委員、北方委員、迫田委員、清水委員、新留委員、末満委員、永山副委員長、藤井委員、松田委員、南委員、山田委員
(欠席：文城委員)

○事務局：瀬戸口市民文化部長、平田地域振興課長、益田地域振興課主幹 ほか

【会次第】

1. 開会
2. 報告事項
 - (1) 第14回会議について
 - (2) 協議会事務局について
3. 協議事項
 - (1) モデル事業段階Ⅲ「地域コミュニティプランに基づく活動」の検証・評価について
 - (2) 検証・評価のまとめについて
 - (3) 各校区への設立時期希望調査について
4. その他

【会議の内容】

※各モデル地域の事情等を含む部分については、A校区等か伏字としている。なお、A校区としている箇所全てが同じ地域とは限らない。

1. 開会
2. 報告事項
 - (1) 第14回会議について
 - ・【資料1】により事務局説明
 - ・【質疑なし】
 - (2) 協議会事務局について
 - ・【資料2】により事務局説明

○委員

・有償とあるが、これは幾らくらい支払っているのか。

●事務局

・手元に資料がないので、確認をして後ほど報告したい。

○委員

- ・開設実績というのは事務局職員がいる日数と考えていいのか。

●事務局

- ・事務局職員の雇用に係る経費を補助しているが、その中に開設の実績としてあがっているのがこの日数であるので、基本的にはその館が開いているということである。

○委員

- ・現在は校区公民館を使っているが、地域振興課の方に移っていくとやがてこの名称はどうか、教育委員会との話し合いはできているのか。

●事務局

- ・現在は3つのモデル地域で実施しているので、今後この館の管理を含めどういった形にしていくか、これは教育委員会と十分協議を重ねていきたいと考えている。今現在どうこうということは決定していない。

○委員

- ・八幡は校区公民館が資料に載っていないが、これはどういうことか。

●事務局

- ・前回の会議の中で事務局の状況はということであったので、校区公民館の方は生涯学習や成人学級、女性学級を開かれて勉強会をされているが、事務局職員が常駐して執務をする状況について報告をさせていただきたいということで、八幡校区の場合は振興会館の方を案内したところである。

○委員

- ・ということは、前回の会議に事務局職員が2人いらしていたのは、振興会の方で協議会を推進、運営していくということになるのか。

●事務局

- ・2人来ていたうち1人は中名校区の事務局職員で、もう1人が八幡の振興会と協議会を兼務されている事務局職員であった。業務内容はきちっと分けている。これは振興会の業務、これは協議会の業務という形で分けているので、協議会の方も同じ部屋を使っている。賃料は確認したところ年額で■万円、1月■千円である。

○委員

- ・開設が約200日ということで、最低賃金で大雑把に計算すると100万円くらいの経費が掛かっていることになる。予算書の確認はできていないが、補助は50万円だったと思う。あとの50万円はどのように調達しているのか。

●事務局

- ・開設の日は朝9時から夕方5時までということではない。基本、午前中の3時間や第2第4土曜日の午前中3時間ということで計算をして、不足分についてはそれぞれ協議会に対して町内会や参加団体から拠出をされている。

○委員

- ・それほど大きな持ち出しにはなっていないと考えていいか。

●事務局

- ・はい。これについては、A校区の場合は2人雇用されているので、そういう意味では市が支出をしている50万円では不足している状況にある。

○委員

- ・デスクなど整備されているが、開設するにあたって、どこも供給されるか備品購入費があるのか。

●事務局

- ・設立に際しモデル地域に示した運営に係る経費というのがある。これはその年度によりパソコンや電話回線料、もし、机やイス等備品がなければ購入してほしいということで、併せてプラン策定時の印刷等に係る経費等もあるので、そういったものを設立年度と次年度、2ヶ年間は運営に係る経費という形で支出をするのでそれをあてていただく。

○委員

- ・モデル地域だけではないということでもいいか。

●事務局

- ・新たに27年度から取組を進める際に、それは予算が伴うことなので明言はできないが、そういう形で支援をしていく。

○委員

- ・A校区の場合、図書室と印刷室であった場所を整理して事務室としたとあるが、図書室はどこにいったのか。

●事務局

- ・この部屋は全体を使っているのではなく、それまであったものを少し奥に整理してきたスペースを使っている。

◎委員長

- ・5ページの図面では分割してあるので分かると思う。

3. 協議事項

(1) モデル事業段階Ⅲ「地域コミュニティプランに基づく活動」の検証・評価について

①【資料3】、【資料4】により事務局説明

- ・【質疑なし】

②モデル事業段階Ⅲ－区分1「プランに基づく活動」の検証・評価作業

○委員

- ・前回、市とモデル地域の取組状況を聞いたが、相互に上手く連携が取れて順調になされていたと思う。拡大期についても同様に行われていくだろうと思う。そうすると、

数が多くなってくる。それぞれ少なくとも20数回、指導を受けたり連携を取っているので相当な数になっていくと思う。連携が上手く取れて事業の実施段階に入ったということである。

- ・評価ということでは、事業がスタートしたばかりで評価の段階までいかない訳であるが、そこで感じたのは、拡大期にあたっては、事業項目が非常に優秀でそれだけ必要だろうと思うのだが、百何十項目あった。そうするとやはり、事業の精選をしてくださいという市側の配慮もあっていいのかなと思う。
- ・特に感じたのは人を集める事業について、これまで地域で行われてきたスポーツ大会などの人を集める事業は近頃の風潮として嫌われる。単純に遊ぶというゲームでさえも嫌われる。そういう事業よりも、健康福祉の観点からいくのであれば、もう少し復合化した目的の事業に変えてみたらという提案をしていくというのにも必要なと思う。あるいは親睦を図るというのであれば、たった何チームか集まって選手は100人にも満たないと思う。それだけで目的が達成されるのだろうかという感じがした。そのためには、既存の関係団体の活動との整合性というものも十分検討する必要があると感じた。

○委員

- ・前回も聞いたが、基本的にはこれまでを踏襲すること、新しく始めること、もしくはなくなったものもあると思うが、地域コミュニティ協議会になったことによるメリット、デメリット、それとも変わらなかったのか、というのが一番肝心な部分だと思う。メリットが多ければ、協議会にしてよかったんじゃないだろうかとなる。そのところをもう少し検証できればいいのかなと思う。
- ・それと、3地域の検証・評価シートにおいて、(2)と(3)の評価記号がそれぞれ同じであった。計画を立てて、主体性があつたかなかつたかというのが、そのまま同じ評価になっていた。ということは、cのところは、計画の段階でつまずいてcになっているのではないか。計画がまずかつたからそうだった。計画をつくるうえでの内容吟味がどうであったのか、去年と同じでいいがで済ませたのかもしれないし、何かしようかというのがあつたのかもしれない。
- ・協議会で違うのは、構成団体が増えているということ以外はそんなに変わらないと思う。構成団体が増えたことによって、何が変わったのかがもう少し明確に出てくればいいのかなと思う。

○委員

- ・自分もいろいろな関わりに携わっている以上、モデル地域として、作業の流れとして、ここまではというのが、市側にもあり、やる側にも、モデル地域としてやらされる側にも、ここまで到達しないといけないという中で闇雲に一生懸命頑張ってきたと思う。
- ・コーディネーターもよき指導をされてのことだと思うが、構成団体が増えました、まだそこまでの段階なのかなと思う。事業やプランの精査をしていくというのはまだこれからなのかなというのを、A校区などの冊子も見て思った。
- ・それと、八幡校区のような大きなところと、人口の少ないところの差異は取り組むう

えであると思う。そのような中で、自分たちの校区も大きな校区なので、より成功したと言っても、一部の人がやって成功したのであって、これから裾野を広げていく段階の中、事業を精査していく段階の中では、これからまた努力が必要なのかなというのを改めて思ったところである。これからまた、市の助言、相談の窓口というのは必要な部分だと思う。

○委員

- ・組織としてはまだ枠をつくっただけだと思う。私も老人クラブで入っているが、批判が相当大きいところもある。今はまだ枠をつくっただけで、実践にはまだいいいなと思う。我々は地域全体を視野に入れた検討をするのが一番大切である。A校区も見たが一応枠をつくった。その中で既存の団体との話し合いまではいってない気がする。

○委員

- ・モデル地域の項目に総会での承認というのがあるが、どこの地域も事業を実施した反省、細かな記録をしている。それを基にまた部会を開き、役員会の承認を得て、総会の前に各世帯に配ったりして、実にきめ細かにしていると思う。大変だろうが、こういう方法でいけば、今後運営も上手くいくのではないかと思っている。
- ・その他については、やはり、期間の問題や、どこで検討するかとか、戸惑いもあったようだが、スタートしてまだ2年そこらであるので、その辺は反省をしているので、上手くいくのではないかと思っている。
- ・関係課との2の方についてだが、準備の段階、計画を立てる段階からずっと実施終了まで関係課の意見とか、指導とか、コーディネーターからの意見とかを十分生かしているようである。こういう形を今後も取っていくといいと思う。

○委員

- ・今の状況を枠組みだけできたと捉えていいのか、それとも、つくることによって従来なかった地域の司令塔ができたので、何か地域に新しい動きを生み出すような芽が出たとか、現状の段階評価というのはちゃんとしといた方がいいのではないかとと思う。
- ・細かいことでは幾つもの目に付くところがあって、すごく良くやられているというのが分かる。この項目に従って言えば、プランを実施するにあたって役割分担を明確にしるとか、事業ごとの実施計画書をつくることとか、反省点をきちんと書いて次に展開させていくとか市の指導というのは枠がしっかりできて上手くできていたと思う。とても大事なことをやられたと思う。
- ・それから地域連携コーディネーターがプランの実施にだけでなく、活動に対する助言をされていたのはいいし、補助金交付申請に関わる実務の指導などを具体的に担当職員がやっているというので、市の取組方としてはきちっとやれていたと思う。だから、そこはそれでちゃんと評価をしておいた方がいいのではないかとと思う。
- ・あと、地域の取組の段階であるが、どこが良くなったのかというのが地域の側から明晰に示されていないというのが気になっている。できれば市の総括で、協議会をつく

ったことでここが少し良くなったよというのを地域ごとに出してもらい評価したいという気持ちがある。

○委員

- ・モデル地域がそれぞれよくやっているというのは分かる。それぞれに特色ある取組をしているのは分かる。自分たちの地域を考えると、町内会が非常に充実しているので、いろんな行事を町内会主体でやっている。今の段階で。その町内会長が言うには、このやり方は良いことだが、我々の校区には段差がある。我々の校区では7つの町内会が独立して何十年もやってきている。それを、今度はこういうプランに基づいて役割分担をしいくとなると、町内会未加入者が50%もいるところもあり、そういう人たちにお金は出さずに活動ばかりしろと言ってできるのだろうか、そこあたりをどう進めるのかというのを、強く言う。7つある町内会のうち4つ5つそういうのが出る。そこを、市としてもこうやっていったらどうだろうかという助言をしてもらえればいいが、モデル地域においてはスムーズにいくようなところばかりしているので、問題点になるようなところが選ばれていけば参考になったのと思う。

○委員

- ・モデル地域が他の地域のモデルになり得るのかというのが判断できない。モデルになるとすれば、どこの部分をモデルとして他の地域に応用していくことができるのか。例えば、話を聞いていると、協議会設立前から一定の蓄積があった地域であったのではないかという印象を持った。A校区では町内会連合会があり、まちづくりのプランもある程度持っていて、きちっとした土台があって、そこから拡大していくという広がりがあり、その活動が若者たちも引き寄せていくという、良い循環を生み出したと思うが、全ての地域がそのようにいくのかと考えると、例えばA校区からであればどこを学んだらいいのだろうかということを出していく必要があるのではないかと思う。鹿児島市は地域によってかなり違うので、違いを踏まえながら、普遍的なところでの引き出し方と、違いは違いとして押さえながらというのが必要だと思う。
- ・やはりモデルだったので、行政からの支援はすごく一生懸命だったと思う。本当に大変な作業だったと思う。これが、他の地域においても同じ支援が受けられるという保証はあるのか分からないが、困難を抱えている地域こそ行政の支援が大切だと思うが、モデルを見てやってくださいねとなってしまうと大変なことになると思う。
- ・また、推進戦略会議の最初の頃で、校区公民館運営審議会が上手くいっているのにこれを否定するのかという議論がされていたようだが、最近はそういうような議論はなくなっているような印象がある。協議会が審議会を否定するのではなく、これまでの審議会の公民館活動を踏まえながらやっていくんだという合意が出てきたのではないかという印象を持った。
- ・やはり、地域を活性化するためには、地域が育つことが重要であり、育つためには学びが大事であり、公民館は学びを一生懸命やっていた機関である。地域住民の自治意識を高めるような学びを一生懸命やっていた。協議会ができて枠が広がったことによって、学びそのものが広がったという印象を、特にA校区の話聞いていて持った。

これを他の地域まで一般化できるのかは分からないが、学びそのものが増えてきたということは良い流れなのかなと思う。ただ、構成団体が増えたことは意味があると思うが、そのことで拡散化するということもあり得るので、核はどこにあるのかということを決めながら、進めていくのが必要なのかなと思う。それがA校区であれば、学びということが核となって進められたことが上手くいっている理由なのかなと思う。

○委員

- ・つくりたい、つくろうという意思を持っていくと、モデルが良いんだよ、こんなになるんだよと話を聞いていくと、受ける側の地域の役員は構えすぎて、マイナス面が出てくる。どうすればいいのかと思う。そういうのをあまり表に出さずに、構成メンバーが増えるとなると、それへの不安が出てくる。まとまるだろうかとか、不安が募る部分が多い。それも踏まえ、行政にきて話をしてもらい盛り上げて、盛り上がった後にまた、それを誰がするのか、どうやるのかとか、増えた分の手間がどうかかるのかとか、そんな話の方が多く出てくるのが現実である。
- ・自分の地域をしっかり踏まえて、現状にプラスアルファして少しずつよくしていくというくらいの心構えでいかないとできないのではないかなと思う。みなさん、モデルに対する評価はすごくいいが、それと同じにはできないということを踏まえながら、では我が地域では何か1つでもいいからというくらいのつもりで、そしていっぺんに、何十という団体でつくるのではなくて、年々増やしていくというような考えでみていくというのもあるかなと思う。

○委員

- ・先進的なところというのは本当に参考にならない。蓄積があったうえで先進的なモデルはできるが、ないところがどうしたらスタートできるのかというモデルはほとんどない。ここに限らずどんなケースでもない。そういう意味では、こんなに素晴らしいんだよって言い過ぎないというのは大事だと思う。

○委員

- ・いいところを摘んでもらおうという思いでやっている。モデルは本当に素晴らしいと思うのと、不安になる気持ちがあるところである。

◎委員長

- ・プランに基づく活動ということころで、行政側の対応、3モデル地域の活動内容について重点的にお話しいただいた。基本的には、皆さんお話しのように、モデル地域の取組のあり方の程度、それへの第3者評価ということで、私たちは取り組んできた。ご指摘のようなことは、取組の草創期には必ず起こることだと思う。
- ・公民館活動というのは、集う、学ぶ、活動するという3つの連動した目標があって、そこが基本になっているので、所管が教育委員会である。これがまちづくりを全部代表しているわけではなく、学びの集いの場の組織機関としての機能を果たしてきたがゆえに、評価が高くなっている。それから、校区公民館運営審議会というのは、その地域の枠をさらに拡大して、そこに町内会だとかいろいろな機能が上手く融合してきているわけである。それで、鹿児島方式と呼ばれるように小学校の中に校区公民館があ

って、地域公民館はまた別にある。

- 今回の地域コミュニティ協議会というのは、町内会などの地縁型のコミュニティだけでなく、NPO だとかまちづくりに関わる企業だとか、つまり昼間型のまちづくり活動と夜型のまちづくり活動があるわけです。企業などは5時以降は撤退してしまうわけですから。まち全体で今日のような社会変動が激しくて、災害や公害がある時代は、やはり町内会だけでは対応できない側面もあり、それから学びだけでは即戦力にならない面もあって、総合的に捉えていく組織が今、求められているわけです。広島の場合を見ても、どうにもならない不可抗力と言いながらも、取組が総合的にされることで効果を奏している。一部分だけではとても対応できない現実も見せつけられているわけである。
- そういう意味で、皆さんから意見をいただいた、ここの取組のところは、地域の多様な団体と連携をしながら取り組んでいくことの可能性を地域コミュニティ協議会は探っているところではないかと思う。
- 大事な点は、モデル地域自身が、ここは皆さんの参考になるのではないかとか、自分たちの今後の課題ではないかというようなことを、これは中々1年だけでは見えてこない部分もあると思うが、こういうところが大事ではないかと思う。
- それから、モデル事業が他地域のモデルになり得るのかという指摘は正に核心をついていると思うが、別の考え方もあると思う。つまり、この地域コミュニティ協議会のモデル事業に指定された時の気持ちは、これから立ち上げる皆さんと同じだったのではないかと思う。1年先にやったからという話ではなくて、そこをどうしてきたかということで、公民連携、PPP というやり方です。パブリックとプライベートとパートナーシップ。これが生まれてきたので、事務局がコーディネーターを派遣して、立ち上げの時期が非常に大事だということを自覚しているからこういう形になったのだと思う。
- 行政側の支援というのが、今後数多く進んでいくと、どうしても分散していくので、支援がモデルの時のようになされるのかどうかというところは心配があるかと思うが、ここは、後で事務局に覚悟の程を聞いてみたいと思う。
- それから、皆さんのご指摘の中に出てきたのは、地域全体を視野に入れた取組。今は町内会は町内会、校区公民館は校区公民館、地域公民館は地域公民館というように、自分たちの組織防衛で動いている。だから、組織率を上げようとかなる。他の組織から見たらそんなの関係ない。自分の組織の問題だから出てくるわけである。ところが、地域全体の共通問題になったときには、それが重要な問題になってくる。ここは論理のすり替えではないが、組織防衛論と地域全体の拡散論となると、目標が今まで違っていたのが、共通目的に向かって動き出す時に、そういう問題をどうしていこうかということになるので、組織率は重要になってくるのだと思う。
- お話いただいた1の項目は、地域全体を視野に入れた取組というのが、地域コミュニティ協議会の1つの大きな柱ではないかということ。個々の組織をどうするかという問題よりも、地域全体をどうしていくかというための組織として協議会が発想として生まれてきているという考え方が重要だと思う。

○委員

- ・地域の主体性の問題に関して言うと、いかんなく発揮されているという印象がある。A校区のケースで言うと、プランを実施するにあたっての核として、まちづくり部会を位置づけた。とある。部会はいっぱいあるが、この部会が核ですよとして、重点的予算配分と人員配置をしたというのは、学んでいいケースだと思う。B校区の場合は好循環が形成されていて、地域に愛着を持つ心を育てるふるさと講座を復活させる中で、講師を地域住民に依拠しているのは参考になる。地域の人的資源を有効に活用するという視点は、どの地域でも学んでいいと思う。C校区の場合は重点9項目を決めている。数十項目にわたる計画の中で、今年はこれをやるというのを決めて臨んでいるという点は参考になる。こういう形で主体性が発揮されているという評価はきちんとしておいていいのではないかと思う。
- ・さらに、役員の過重負担の問題がほとんど議論になっていない。これだけ大きな組織をつくったわけだから、スタート時点では、役員のなり手がいないとか、いろんな組織に同じ人が何度も出ないといけないというのがあって、これをなんとかしないといけないというのがあったはずである。それがこの議論からすぽっと落ちているのが気になった。

◎委員長

- ・3地域の核になったものが何か。それは、メリット、デメリット、これが強みですよというもの、強みと弱み、脅威とチャンスの4つに分けられる、SWOT分析のように。そういうように、地域の主体性についての確認。まちづくり部会が核になって機能していった。ふるさと講座ができて、自分たちのまちの歴史を学ぶ場所になった。地域の人材活用につながっていった。人を生かす。人を生かすことが組織を生かすことになる。
- ・そして、非常に大事なことだと思うが、今年はこれをやる、これはできないと、ここに順位ができてくること。優先順位や重要度。すべてヘッドスタートで馬のようにヨーイドンで全部やっていくのではなくて、これからやっていきましょうとすれば、力を集中できる。ヨーイドンですると力を分散して弱くなってしまう。なんでもかんでも手を付けなければならないとなってしまうと、中々厳しいのではないかと思う。今年目標をこれに絞ってやるというのは生かされるべきだと思う。

③モデル事業段階Ⅲ－区分2「推進体制」の検証・評価作業

○委員

- ・この会議に3モデル地域の会長さん方がいらしたが、3地域同士の情報交換会というのはやっているのか。この事業はうちでもやろうとか、この運営手法はいいなとかのモデル同士の情報交換。ここで話を聞くのと、生の声をお互いにやり取りするのは違うのかなと思う。これは使えるなというのがあると思う。地域の特性があるにしても、使える部分、とても真似できないという部分があると思う。ワンステップ上げていくための試みになるのではないかと思う。

◎委員長

- ・モデル地域同士の情報交換というのはなくても、地域連携コーディネーターが入っているんで、情報は巡回している。

○委員

- ・情報と生の声というのは違うと思う。

●事務局

- ・今の指摘については、3モデル地域の会長さんからもあった。3月に会議の後に設定した。その前に、A校区でおやじの会が物販をするのに、何か良い物はないだろうかと協議をされていた際に、■中学の先生がB校区出身で、協議会同士で提携してみようかというような事例があった。市としては、3つでとどまらず、今後協議会を設立していくので、協議会の会長さん、事務局職員の意見交換とか交流会とかいうのを、順次開設していきたいと思っている。3つの中では、こういう会がある時に少し話をされるとか、コーディネーターが情報を持ち込んだりとかにとどまっている。今後は、そういう活動も徐々に拡大していきたい。

○委員

- ・市あいご連のあいご新聞の編集員をしている。合併10周年で、合併した中の5つの校区から活動報告をもらった。まだこれは編集中であるが、A校区のあいご会から、地域コミュニティ協議会ができたことで運営がスムーズにいくようになったと報告があった。これはひとつの推進するプラスの材料だと思う。そのように感じているのを目の当たりにして、上手くいっている、以前よりよくなっているんだなと思った。

○委員

- ・3モデル地域は、これからそれぞれのブロック単位のモデルになっていくと思う。他の校区に対する普及啓発活動になっていくといいと思う。■地域にはモデルがなかったんで、どうしようと思うが、審議委員長同士で集まって意見交換をしていこうということになってきている。結果を出しなさいというと、みんな良いところしか言わないというのはたしかなんですけど、地域の中で、デメリットをメリットに変えていく、発信役をモデル地域はこれから担っていかなければならないと思う。
- ・また、事業所や関係機関を巻き込んでという中で、枠組みができて情報が共有できるようになった、1つのまちとして共有できるようになったというのはとても大きい。それが、スムーズな運営につながっていったらと思うので、そういう面も含め、緻密な報告があれば、それを生かして次の段階にいけるのかなと思う。

○委員

- ・少しでもいいコミュニティを目指していこう、そのためにどうするかというのでつまづいたり、意見を交換しているところである。これを今度は、■地域で共有できると思う。そして、校区の特色を生かしていこうとやっている。私の校区は上手くいっているのではないかと自負している。
- ・町内会がいろいろあると、それぞれの特色があるから難しい。しかし、互いに少子高

齢化に向かってどうしていけばいいか、一緒にするのは校区でやろう、活性化していこうとしている。市は、各地域の町連協に説明に行くことはあるか、そのときに問題点はどのようなのが出てくるか。

●事務局

- ・これまで、校区公民館運営審議会が発展解消されることから、校区審を中心に説明をしてきたが、その中で、地域の主体的な中心となっている団体ということで、町内会の連合組織も校区で協力をしあっているというところにもいくつか伺って説明をしている。■地域の場合、そういったところに行っているので、モデル地域の取組状況についても話をする中で意見を伺うが、一番不安に思っているのは、先が中々見えないということ。今とどう変わっていくのかということ。中には町内会がなくなるんだろうと言う人もいる。その度に、そういった疑問点に答えながら、心配事を払拭しながら、取組を進めているところである。今後は、拡大期を迎えてということになると、今以上に、そういう説明を重ねていかなければならないと思っている。市としては、校区審を中心に活動しているので、校区審に十分理解をいただき、その委員の皆さんが地域に説明をしていただくということで考えている。

○委員

- ・一週間前、私の校区で、設立準備委員会の準備委員会を開いた。第1回で10人集まって、毎月開きましようとなった。その中で、コーディネーターにきてもらわないといけないという話になった。これから20校区ずつ増やしていくとのことである。最初、コーディネーターが1人で、3モデル地域であった。今は増えているが、例えば、1人のコーディネーターが3校区を受け持つとしたら、6、7人必要となるが、蓄積があるのは最初のコーディネーターだけである。同じ蓄積ではない。ノウハウをどれだけ受け渡しできるかが問題である。コーディネーターを何名くらい育成して、最低何名必要と考えているのか。

●事務局

- ・今、コーディネーターは6名配置している。26年度の上期においては、新たな5名のコーディネーターについては、3モデル地域の取組をはじめとして、今後どのように進めていくのかという研修を行い、説明会に同席をしながら、地域の皆さんがどういったことを考えているのかを聞いてもらっている。毎年度20校区を目標に設立していくとなると、1人で大体3、4校区担当するということになる。単純に割崩すと20数名が必要となるが、先行したところが3年目となると、設立準備段階から設立後のプラン策定の部分は非常に重要で時間を要するが、軌道に乗り出すと地域が自主的に考えて動くというのが出てくるので、少し緩和されてくるので、次の20校区へ次の20校区へという形でイメージしている。
- ・今後は、コーディネーターについても確保していきたいと思っている。今、本庁の職員が中心となっているが、支所にも地域振興の担当職員もいるし、それぞれ課長もいるので、それぞれのエリアの校区においては、同席をしながら地域情報の収集に入っている。それぞれのエリアの協議会については、支所に対応できるように職員への研修も図っていききたいと思っている。

○委員

- ・懸念に思っているのは、地域公民館の位置づけがどうなっていくのか。個人的には、やはり地域公民館がこれからの地域コミュニティの核になっていってほしい。事務手続きなど。支所もだが、中央部には支所がないところもある。そういったときの整合性。これまで地域公民館の中に校区公民館連絡協議会というのがあって、その中で話し合いをしたり、生涯学習の活動をやってきたが、そこと支所の連動性。先日、支所長と話をしたら、これからどうしていったらいいんだろうということだった。支所長さんたちも変わっていく。そうなった時、核となる場所、手続や相談窓口をするには、これまでのブロック単位を生かしていく方がベターではないかと思う。それに対して、行政とつなぎをつくる面で、支所単位というのとやっていくことの整理をしないといけないと思う。地域公民館に窓口になる人、相談できる人が1人ずついてほしいと思う。これから拡大していくにつき、そういうことを考える。1回1回書類を届けに行くというのも大変なことになると思うので、そういう単位で動くというのがいいと思う。

○委員

- ・推進ではないが、3モデル地域と行政の縁というのはこの後どうなるか。

●事務局

- ・26年度までがモデル事業の取組ということで、段階Ⅲについてもまとめていただきたいと考えている。27年度以降は、20校区を目標に設立していきたいと思っているので、それぞれ担当のコーディネーターについては支所エリアだったりの形で配置をしたいと思う。喜入だと中名がモデル地域としていま活動しているが、27年度以降はモデル事業ではなくて、本格実施ということで進める中で、エリアごとにコーディネーターを配置しながら、支所の職員と一緒に支援をしていくという形で取組を進めていきたい。

○委員

- ・もうさよならですよというわけではないですね。

●事務局

- ・そうではない。また、先程申し上げたように、協議会の会長さん方の横の連携というものも図っていきたい。定期的に交流会や会合をもつていただくとか、エリアごとの連絡調整というのもあり方として必要だと思っている。順次設立していくにあたって、そういったものも構築が必要だと思っている。

○委員

- ・そうすると、14、5人のコーディネーターが向こう10年間くらい地域に張り付きながら動いていくというイメージでいいのか。

●事務局

- ・現在、20校区を4年間、そうすると79校区設立できる。26年度の下期から具体的に準備作業に入る時は、現在の6人体制のコーディネーターが手分けをしながら、入っていく。27年度中に新たに設立を目指すということで準備に入る時には、今の

コーディネーターはプランづくりの段階に入っているので、27年度から28年度にかけて新たにつくる校区には、27年度に新たにコーディネーターを増やして、上期に養成しながら下期以降地域に入ってもらおうとなっていくと思う。29年度は今度は、26年度のコーディネーターが入りながら、一方、プランに基づく事業の推進をしていく。

○委員

- ・12年間に12, 3人の人間が張り付きながら動いていくというイメージですね。

○委員

- ・10年くらいのタームで考えれば、先行しているコミュニティから、後からへの援助ができる。

○委員

- ・ブロックの中で集中して立ち上げるというのもあると思うが、ブロック単位で1つ2つずつ選んでいくと、地域の中での支援体制もできていくと思う。

●事務局

- ・いろんな考え方があつた。モデル地域の選考をする中でも、そういった議論があつた。教委から地域の活動状況の資料を集めながら、大きなブロックの中で20校区程度に絞りこみながら、人口の規模だとか、地域的なバランスなどを考慮しながら、最終確認としてお願いを相談した時に、北部の方にもあつたが、我々はまだ早いということで断られた。そういうこともあり、南にシフトしている。これは、モデル地域であつたので、市が選んだわけだが、いま回る中で、是非取り組みたいという声もいくつか出てきている。そういう中では、やはり積極的なところを支援していきたいと思っているし、1年2年進んでいけば、設立したところがまた次の先生役になっていく。モデル地域も薩摩川内市など先行しているところを視察したが、今朝は■校区がA校区を訪問した。少しずつ輪が広がりつつある。地域の状況がどうなのか具体的な話が聞きたいというような声があがっている。

○委員

- ・それぞれ地区説明会がある。■校区のを目にした。これまでの説明会でこういう質問があつてこういう回答をしたというのを見た。どうしてもやらないといけないんですか、そうです。というのを見た。説明会の前に、どうしてもやらないといけない決定事項ですというような資料があればいいのかなと思う。5項目くらいでもいい。決定事項ですというようなのを資料として先に入れておいて、それから説明会に入れば20分くらい短縮できると思う。浸透させないといけないと言うが、みんなそうじゃないのではないかとも思う。役員とその次の人くらいで、底辺の人は、上手くやってくれよ手伝いはするからというくらいにしか思っていないのではないか。校区公民館運営審議会というのが何か知らない。多分7割は知らない。底辺の人は、実は、頑張ってもらえばそれでいい。手伝いはしますからというのがほとんど。そうであれば、もう少し効率よく説明会をするような資料や手法があつてもいいのではないかと思う。やらないといけないんですかと資料に書いてあつた。地域の方がつくられたのかもし

れないが。我々が地域住民に説明する際にもそういった資料が必要だなと思ったところである。市が良い資料をつくれれば、そのまま使えるなと思った。

○委員

- ・先日説明にきてもらったが、難しいよねで消えてしまうようなこともある。しないといけないとなると、誰かがハマってやるという気持ちになるんじゃないかと思う。

●事務局

- ・76校区回るうち8月末までに73校区が終わる。そうすると、はじめて聞く人というのは、どこで決まったのかという。総合計画にもある、具体的には総合計画の最終年度の33年度までにはつくる、長くなると先行組とのバランスが悪くなるので、できるだけ短縮したいと説明している。そういう中で、資料等についても、Q&A という形では準備していないが、今回、地域コミュニティ協議会の設立がはじまりますということで、9月号の市民のひろばと同時配布をするチラシを作成したので、後ほどお配りする。そこに3問ほどQ&Aを出してはいる。

◎委員長

- ・心配はもっともだと思う。説明はできるだけ分かりやすい方がイメージが描きやすく説得力がある。同時にそういう資料作成というようなのは大事になってくる。その他、情報の共有ということと、ネットワーク化。ネットワーク化とネットワーキング。考えるということと、組織化するというものを分けて考えなければならない。組織と、組織化して考えるということの2つ。組織ができたらどうなるんだろうかというネットワーキングが指摘された。
- ・今後進める際には、モデル地域だけではなく、地域の連携が効果があるのではないかというのが出てきた。コーディネーターのあり方というのが大きな決めてを持っている、それから地域選定、ブロックごとにいくのか、地域づくりというのは熱意がある方からというのが基本ではあるが、地域の拡散ということでバランスを取っていくという双方で考えていかなければならないのではないか。ただブロックに割り当てても、出番を待っているところと、積極的にやっていきたいというところに意識の差もあるだろうし。事務局の調整も含め、総合的に取り組んでいただきたいということだったと思う。

◎委員長

- ・時間の都合もあるので次に移りたいと思う。以上で、戦略会議の段階Ⅲの検証・評価作業は、一通り意見をいただき、皆さんはペーパーも提出されているので、一度閉じたいと思う。本日の意見を踏まえて、とりまとめの結果については次回の第16回会議で確認したいと思う。

(2) 検証・評価のまとめについて

- ・【資料5】により事務局説明

◎委員長

- ・今回の会議でモデル事業の検証・評価を一通り終えたことになるので、これまでの検証・評価全体を振り返り、モデル事業全体としてのまとめを協議していただきたい。事務局から、これまでの事業に関して市からの働きかけなどは概ね適切であったというような判断につながる意見もいただいたし、また、委員の皆さんからも、拡大期における取組の視点をいくつかいただいたが、これらを含め、この件は是非というような、ポイントを絞って協議をしていただく。

●事務局

- ・本日協議をいただいた段階Ⅲの検証・評価、これから協議をいただきたいモデル事業全体のとりまとめについては、次回の第16回会議において最終報告という形で確認をいただきたいと考えている。

◎委員長

- ・今まで、事務局と各委員から意見があったところだが、皆さんの今までのところの意見を集約すると、とにかく推進戦略会議としては、モデル事業における市の働きかけは概ね適切であったと判断しているのではないかと思います。各委員のみなさん、概ね適切であったということで了解していただけますか。

○各委員

- ・はい。

◎委員長

- ・それではそのように取り扱いたいと思う。そして、これまでの検証・評価の結果である、各段階での拡大期における取組の視点、今日もいくつか皆さんから意見を出していただいたので、それを十分踏まえて、次の取組に活かしていただきたい。やはり、地域性が違うので、捉え方の重要度も地区によって違ってくるのではないかと思いますので、今日お出しいただいた意見、取組の視点を十分に検討しながら、地域コミュニティ協議会を全市域に順次設立していただきたいと思います。このように検証・評価をまとめることができるのではないと思うが、その点についてはよろしいか。

各委員

- ・はい。

(3) 各校区への設立時期希望調査について

- ・【資料6】により事務局説明

○委員

- ・全校区説明に回ったのか。

●事務局

- ・76校区のうち73校区を回っている。あと3校区残っているが、教育委員会とも連携を取りながら説明していく。

○委員

- ・回答が、29年度以降にするという1箇所集中してしまったらどうするか。

●事務局

- ・73校区を回った中では、27年度には取組を進めたい、26年度の下期から準備に入りたいという校区もいくつかあるところである。また、若干時間がかかるのではないかと感じる校区もある。職員、コーディネーター、支所の職員と一緒に回りながら、いくつかのエリアでは、ブロックごとのモデルを先に立ててということも先程あったが、地域によっては足並みを揃えて一緒にやっっていこうというようなところもあるので、エリアに偏りはできるかもしれないが、取組を進めたいという手が、複数あがる場所もあるのではないかと考えている。

○委員

- ・半年単位になっているが、実際に本格的になるとやはり4月からになるのか。年度を考えると。

●事務局

- ・モデル地域でもそうであったが、年度の途中での設立ということも当然考えられる。制度上のことを考えると年度の頭がすっきりしていいというものもあるかもしれないが、一番懸念しているのが、校区公民館運営審議会の委員を含め、年度で委員が変わらるとしたときに、前の人が決めたことを何も知らなかったと言われても、地域の皆さんを合わせて混乱をするので、その引き継ぎをどうしていくかということになると、1つの例としては、年度の途中で立ち上げをして、その中に次の年度の委員も入り込みながら上手く引き継ぎをしたらどうかとか、地域で工夫や協議をしていただきたいと思う。

◎委員長

- ・20校区を超えた場合はどうするか。

●事務局

- ・20を超えた場合は、ありがたい悲鳴ですので、一生懸命取り組みたいと思う。ただ、逆に数校区不足という時は、次の年度の比較的早いうちにというところを少しお願いして、20校区を超えるようにやっていきたいと思っている。

○委員

- ・■校区を中心にしてほしい。■地域は■校区が中心である。校区社協にしても、専門部を4つ設けている。各部会がものすごく一生懸命やっている。全ての部会がやっている。■校区に力を入れていただきたい。私も力を入れる。

4. その他

- (1) 事務局より全世帯配付広報チラシの配付と説明
- (2) 平成26年9月20日開催の公開シンポジウムの説明